

都市空間における地区としてのまとまりの認識とイメージに関する研究

Study on the recognition and the image of integrated setting as district in urban space

学籍番号 47-106771

氏名 矢野 麻里子(Yano, Mariko)

指導教員 浅見 泰司 教授

研究背景

近年の日本では、地方衰退や人口減少を背景に都市間競争が進み、各都市が地域の個性確立を目指す動きが盛んである。行政機関は個性豊かなまちづくりを掲げ、規制・誘導により他都市との差別化を試みている。開発主体の民間業者もまた、各地で大規模な再開発を行う中で、他との差別化を目指し、地域の個性創出を図っている。立場は違うものの、他と差別化された地域イメージの形成という目的は共通であり、多くの関心が集まっていると考えられる。

「まとまり」と地域イメージ

現在、多くの都市計画指針やガイドライン、景観計画等において、まとまりある都市空間形成を目指す取り組みがある。具体的には、建築用途の統一、一体的自然環境の整備、建築物の形態や色彩の統一による一体感の創出などがあり、それらを複合的に用いて開発が行われている。しかし、前述のようなまとまりの創出や地域イメージの確立に関する施策であっても、過度の規制や誘導、手法を誤るなどによって人工的に作られたテーマパークのような印象を与え、没個性化を助長する場合もあり、必ずしも地域の個性創出に貢献しているとは限らないと言える。

既往研究と本研究の位置づけ

K.Lynch による「都市のイメージ」発表以降、都市・地域のイメージを扱った研究が数多く行われてきたことから、独自の地域イメージの形成に対する関心は依然として高いことがわかる。K.Lynch による「都市のイメージ」では、5つの要素(ランドマーク、パス、ノード、エッジ、ディストリクト)の関係性から都市形態の操作方法が述べられているが、具体的な条件や地域形成方法は言及されていない。また、志水らによる「街のイメージ構造」では、都市における物的環境と心的環境の関係について述べているが、方法論まで及んでいない。さらに、計画・方法論的視点を持つものとして、福井・篠原らによる「グレイン論」を用いた一連のイメージ分析があるが、これらは街路空間に限ったイメージを対象とし、“歴史的”や“下町”といった特定の形容詞に着目した研究であり、面的で多様な地域イメージまで扱うには至らなかった。このように、大多数の研究は物理的要素の分解や定量的な分析にとどまるのみの研究であり、現在必要とされる計画・操作論的立場において実際の都市に直接適用できる方法が示されていないと言える。

そうした点を踏まえ、以下のような目的を設定し、研究を行う。

研究目的

本研究における「まとまり」とは、「比較的似たイメージを持つ地域」であり、そのイメージは他地域と差別化されたものと考えられる。「まとまりとして感じる＝似たイメージを想起させる要素が集積し、何らかの地域イメージが形成されている」と定義する。

以上を踏まえ、本研究では「まとまり」を認識する構造や人が感じるまとまりと、まちのイメージとの関係を明らかにする事を目的とし、次章で述べる分析を行う。

分析に基づき、まとまりの認識構造、まちのイメージ形成に対する影響を明らかにする。また、まとまりの認識と都市空間の実態の関係について分析を行うことによって、地域イメージ形成の計画・方法論に示唆を与える事を目的とする。

研究方法

調査方法の検討・確認のために、新宿を対象地としてアンケートを行い、事前調査とした。アンケートの性質上、一般的にまとまりを認識しやすく、被験者が一定の土地勘を持つ地域を対象地とした。

事前調査として10~20代の学生19名にアンケートを実施し、まとまりの認識について分析し、研究手法の検討を行った。

事前調査の結果に基づき、本研究の対象地として渋谷と下北沢を選定し、20代の学生50名にアンケート調査を実施した。回答結果から、まとまりの認識、まとまりのイメージの認識について定量的な分析を行った。さらに、まとまりとして認識される範囲やイメージにどのような違いがあるか分析する。そして、まとまりの認識にどのような要因が影響しているかという事につい

て、自由記述によって得られた都市空間要素の物理量を変数とする回帰分析を行い、まとまりを認識する構造を明らかにする。

まとまりの領域の認識に関する分析

アンケートでは、被験者に「まとまり」の定義について説明した上で、各対象地域について、地図上にまとまりと感じる領域を囲ってもらい、まとまりと認識される地域やその領域の違いを把握する事が出来た。

分析の方法は以下の通りである。

まず、全被験者が回答したまとまりの閉曲線を重ね合わせ、分割された領域を最小地区単位とする。この最小地区単位の領域内は、すべての人がまとまっていると認識している領域であることがわかる。

さらに、接する最小地区単位のペアごとに、2つを違う領域とした人数を全人数で除した値を、認識の違いを示す距離として算出することにより、最小地区単位同士の認識上の距離を求めた。

認識上の距離が近い地区同士ほど、多くの人に同じまとまりとして認識されており、認識上の距離が遠い地区同士は、違うという認識が強いため、まとまりの認識における強い境界として抽出することが出来た。

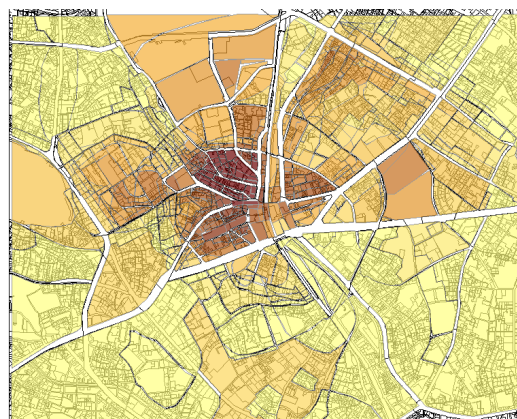


図1. 渋谷の最小地区単位の分布と認識頻度

まとまりのイメージの認識に関する分析

アンケート結果から各まとまりを象徴するイメージを抽出し、まとまりの領域とそのイメージを結び付け、分析を行った。各対象地域のイメージの認識から9つの概念でイメージを分類することが出来た(図2)。

認識の頻度と分類結果を以下に示す。

被験者が認識したまとまりのイメージは様々であったが、特定の地域ではあるイメージが多くの人に認識されている場合があった。最小地区単位ごとに、その地区を内包するすべてのまとまりのイメージ概念を集計し、最も優位なイメージ概念を抽出することが出来た。

各最小地区単位について最優位の概念として抽出された頻度は、渋谷で地名・集合体の名称が最も高く、下北沢で土地利用が高いという結果が得られた。街の特性によって、人々が共通して認識しやすい概念が異なることがわかった。また、各まとまりに良く訪れる場合と、あまり訪れない場合に、同じ地区で抽出される最優位の概念が異なることから、街を良く知る人とそうでない人では、まとまりのイメージの認識が異なることがわかった。

まとまりの形成要因に関する分析

これまでの分析から、被験者やまとまりによって、その領域やイメージの認識が様々であることがわかった。その中でも、まとまりの境界として多くの人々が共通して認識した箇所について、その境界を示したすべてのまとまりのイメージを集計し、境界の認識において優位な概念を抽出した。

渋谷では、「住宅」「若者」「おしゃれ」「高級」のイメージを持つまとまりについて、

土地利用	住居系	住宅地	15	17	単体の名称	東大・駒場	駒場	5	9	
		アパート群	1			東大	4			
		住	1			マークシティ	8			
	飲食系店舗	繁華街	5	10		青山学院	青山学院	2	4	
		飲み屋	4			青学	2			
		食の街	1			キャットストリート	4			
	服飾系店舗	飲食	5	10		NHK	3	都市構造	タワレコ	3
		ファッション	2			ハルコ	3			
		服	4			ハチ公	2			
		セレクトショップ	2			ちとせ(会館)	2			
	娯楽施設	ブランドショップ	2	5		宮下公園	3	井の頭線	4	
		娯楽	1			山手通り	1			
		遊び場	3			青山通り	1			
	公共・文化系施設	エンタメ	1	4		山手通り	2	裏	5	
		文化区	2			中心	3			
大型店舗	公共	1	3	高級	10	雰囲気	高級	10		
	区役所	1		ハイン	1					
	デパート	1		おしゃれ	5					
地名・集合体の名称	百貨店	1	3	お洒落	3	印象	オシャレ	3		
	大型店舗	1		狭く雑然	1					
	歓楽街	3		ごちゃごちゃ	1					
	学校区	6		ごみごみ	1	3	ちまちま	1		
	オフィス	3		整然	2					
	センター街	23		金持ち	2	人	ギャル	2		
	宮益坂	6		学生	2					
	原宿	6		空間的まとまり	1					
	道玄坂	10		桜丘	2	3	広場	1		
	渋谷	3		桜ヶ丘	1		代々木公園	9		
松濤	3	神泉	2	ライブ	2					
代官山	3	宇田川	2	行動・経験	買い物	3				
桜丘	2	神南	1		散歩道	1				
桜ヶ丘	1	コミュニティ	3		抜け道	4				
地名・集合体の名称	桜丘	2	3	コミュニティのまとまり	コミュニティ	3	行動・経験	抜け道	4	
	桜ヶ丘	1			通行道	4				
	神泉	2			通行道	4				
	宇田川	2			通行道	4				
	神南	1			通行道	4				
	コミュニティ	3			通行道	4				
	桜丘	2			通行道	4				
	桜ヶ丘	1			通行道	4				
	神泉	2			通行道	4				
	宇田川	2			通行道	4				
神南	1	通行道	4							

図2. まとまりのイメージの頻度と分類(渋谷)

土地利用	飲食系店舗	飲食店・街	7	12	単体の名称	北口	7	都市構造	北口	7	
		飲み屋	3			南口	7				
		居酒屋	2			西口	2				
	服・衣料系店舗	古着	5	8		劇場(本多劇場)	5	東大・駒場	東大	2	4
		衣料	1			駒場II	1				
		服	2			駒場	1				
	商店・商店街	雑貨	2	7		王将	2	都市構造	線路	2	
		商店街	6			東	1				
		商業	1			西	1				
	日用品店舗	生活品	2	3		駅を起点とした方位	北	1	霧困気	北	1
		日用品	1			南	1				
	地名	住宅	7	3		ごちゃごちゃ	4	行動	オシャレ	3	
		学校	3			オシャレ	3				
		娯楽	4								
	行動	下北・下北沢	7	3		買い物	2				
買い物		1	ショッピング		2						

図3. まとまりのイメージの頻度と分類(下北沢)

境界の認識の一致が高い結果となった。

下北沢では、「住宅」「飲食店」「古着屋」のイメージを持つまとまりについて、境界

の認識の一致が高い結果となった。同じイメージで括られたまとまりでも、その領域の認識は個人差があるが、これらの概念は、特に境界の認識が一致しやすいと言える。

また、多くの人々が、土地利用の概念に基づいてまとまりを認識していることが明らかとなったため、まとまりの認識と都市空間の実態について、主に用途地域・土地利用と比較・分析を行った。

その結果、渋谷は用途地域上で統一された商業地域の内部で、強い境界が多く抽出されたが、土地利用の変化する箇所と比較的強い境界が認識されているとわかった。

下北沢では、同じ用途地域内で、土地利用も統一された地域内部で、線路に沿った強い境界の認識が多く認識された。土地利用はまとまりの認識上重要な概念ではあるが、線路など視覚的・空間的に分断される境界の方が、まとまりの認識に与える影響が大きいと考えられる。

総括

本研究で行った手法によって、都市空間におけるまとまりの認識構造を明らかにすることが出来た。特に、まとまりとして認識する領域の違いを定量的に抽出した。

また、まとまりのイメージの認識について、各対象地域で特定のイメージが多くの人に認識された地域を抽出した。さらに、まとまりについて多くの人々が共通して認識した概念を抽出し、まとまりの認識におけるイメージ概念の優位性を明らかにすることが出来た。

加えて、まとまりの認識と実態との違いから、まとまりを形成する上で重要となる要因について明らかにした。

概念	渋谷			下北沢				
	1-0.9	0.9-0.7	計	1-0.9	0.9-0.7	計		
土地利用	飲食店	1	8	9	学校	1	1	2
	服飾系	2	3	5	住宅	7	6	13
	商店	3	3	6	古着・服	1	5	6
	繁華街	1	0	1	飲食店	2	16	18
	娯楽	0	2	2	商店	0	2	2
	住宅	5	9	14	生活系	0	1	1
	歓楽街	0	1	1				
	学校	5	4	9				
	ホテル街	0	2	2				
	オフィス街	2	2	4				
雰囲気	おしゃれ	3	5	8	雑然	0	2	2
	高級	0	4	4				
	閑静	1	1	2				
	雑然	2	1	3				
	混雑	0	6	6				
	流行	0	1	1				
客層	夜	0	2	2				
	若者	0	12	12				
	金持ち	1	0	1				
地形	社員	1	0	1				
	坂	0	2	2				
自然	街路樹	0	1	1				
	公園	2	5	7				
空間	空地	0	1	1				
	広い	0	1	1				
道	ネオン	0	2	2				
	建物							
名称	マークシティ	0	1	1	本多劇場	0	1	1
	パルコ	0	1	1	南口	0	2	2
	センター街	1	3	4	北口	0	1	1
	タワレコ	0	1	1				
	キャットストリート	0	4	4				

図4. 境界の認識において優位な概念の集計結果

課題と展望

被験者の属性や、まとまりの領域の認識について回答を得る方法について、課題を得た。都市や地域イメージに影響を与える要因は様々であることから、まとまりの認識に関して、より包括的な研究を行っていく必要があると考えられる。

参考文献

- 1) K.Lynch : 都市のイメージ
- 2) 志水英樹 : 街のイメージ構造
- 3) 福井恒明、篠原修 : グレイン論による都市のイメージ分析, 土木計画学研究・講演集 No. 30, P65, 2004
- 4) 石見利勝・田中美子 : 地域イメージとまちづくり, 技法堂出版, 1992.